

もじれる社会

－戦後日本型循環モデルを超えて－

本田由紀 著

著者は、教育社会学者として現代社会において工業教育が果たすべき役割を深く理解され、「工業教育資料」の第323～327号に専門高校の意義を再発見する視点で論説を執筆された。関連する内容は本書第4章に取り上げている。

タイトルの「もじれる」とは「社会のありようと、それを見ている自分の感情を、一挙に言い表そう」と考えた言葉であった。既に「よじれる、ねじれる」の意味で辞書にあることを知った後も、「もつれる＋こじれる」が混じり合った悶々とした感覚を表す言葉として「もじれる」を使っている。現状の日本社会を見つめ、分析し、その打開策を探ろうとする意欲が感じられ、示唆に富む良書である。

「第1章 社会の「悲惨」と「希望」」では、著者の日常的な活動や体験の中から悲惨と希望の場面を捉え分析している。「わが国の悲惨は、不可避ではなく、積極的意図ないしは消極的怠慢の結果」とし、ヨーロッパ諸国の福祉機能や雇用環境の保護制度に比べ、その遅れを指摘している。「希望」の項では、何校かの学校訪問で、多様な高校生との対話から「彼らはしっかりと感じ、考え、行動し、生きていこうとしている。その意見をおさえこむのでも彼らにおもねるでもなく、きちんと向き合うこと」が大人に求められる姿勢だとしている。

「第2章 戦後日本型循環モデルの終焉」は、座談会形式で始まっている。

現代社会は、産業構造や価値観の変容によって、従来型の認知的な能力とは違った多様性と新奇性、創造性、ネットワーク形成力などの、

伝達や習得・計測も困難な能力が必要になっていると主張している。また、激動する社会の中に生きる若者と仕事・教育については、統計データを示し、戦後の経済成長の浮き沈みと高校や大学進学率、卒業後の就労等の課題を明らかにしている。さらに教育・仕事・家庭の社会領域の循環について、日本独特のシステムを図示して解説し、その破綻が現実化していると述べている。また、教育の職業的意義については、日本の教育の職業的な希薄さを指摘し、「柔軟な専門性」の教育の必要性を主張している。

「第3章 若者と雇用」では、「若者にとって働くことはいかなる意味をもっているのか」の観点から、データをもとに若者の働き方の変化について考察している。特に、非正規社員等に見られる雇用形態の多様化、労働条件の悪化が進んでいるにもかかわらず、若者からの異議の申し立てが希薄とし、労働法や労働者の権利に関する知識とそれを実行するための具体的な方法が身に付けられていないと指摘している。さらに、若者と雇用を巡る現状と雇用政策の問題点もまとめ、特に新卒者イコール正社員という円滑な接続は大卒でも半数に達していないと指摘し、職業の実践的な教育を提案している。

「第4章 教育のアポリア¹⁾」では、「教育の職業的意義」の希薄さを取り上げ、普通科高校の課題を資料を基に提示し、その改善策を示している。次に専門高校の職業的意義の有用性をデータを提示し強調している。

「第5章 母親・家族への圧力」では、子育てへの母親の負担が増しているとし、特に家族と教育はある意味切り離し、教育は社会が行うべきとしている。また、「人間力」「社会人基礎力」「就職基礎力」などを総合的にとらえる概念として、「ポスト近代型能力」を提唱している。

¹⁾アポリア（一般に解決できない難問、広辞苑）